

## 第12課「愛と律法」

### 安息日「今週のテーマ」

今週は12、13章を学びますが、12章1節の「こういうわけで」の言葉にパウロの思いが含まれています。今まで信仰による義によって救われることを語ってきましたが、ここからはこの神の恵みに応える具体的なクリスチャンの生き方を述べますとの意味があります。義が与えられた者の生き方についての勧告が告げられています。

### 日曜日「生けるいけにえ」

神の憐れみに具体的に応答するとは、自分の体を神に奉げる事だとパウロは12章の初めで明確に語っています。この時パウロが述べている「体」とは身体のみではなく、知、徳、体に係わるところの全人（わたしの全ての存在や生活）を意味しています。クリスチャンとして全てが神との交わりと聖霊の導きによって新たなものとされ、神と調和していくことが求められています。「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（1コリント10：31）と求められています。しかも、自分で頑張るのではなく、新たにされた心に湧き上がる愛の力に従って無理なく自然体で神の栄光を現していくことが求められています。

### 月曜日「自分を考える」

信仰によって義とされた者は、自分に対しては謙遜な態度が生まれ、他の人に対しては愛の実践、すなわち「全ての人と平和に暮らす」生き方が生まれてきます。律法の要求する神への愛と人への愛が、毎日の生活の中で表れてくるのです。

### 火曜日「政府との関係」

義が与えられているクリスチャンの社会との関係は、権威に従い自分の義務を果たすことです。ローマ帝国やユダヤ人の権威からたくさん迫害を受けていたパウロが、この言葉を語ることは不思議と思われそうですが、権威は神に由来しているという理由が考え方の源となっています。ガイド84頁下から3行目に「われわれの道を不必要に閉ざすようなことを、言ったりしたりしてはならない」とあります。罪の社会の中において、わたしたちが本当に争うべき点を間違え、大切なポイントを見失わないようにするための注意が必要です。

### 水曜日「他人との関わり」

今日の学びの最後に「どうしたら、神が人を愛するように人を愛することができますか」と質問があります。答えは、「人の愛」ではなく「神の愛」を受けるときに、神のように愛することができるようになるのです。そして、義が与えられている者とは、この神の愛を心に受けることのできる者とされているということです。律法が要求するところは「愛すること」ですが、信仰によって義とされている者は、この律法の要求に応えることのできる者、すなわち律法を全うするものなのです。

### 木曜日「救いは近づいている」

再臨において神の義がこの世界に明らかとされますが、キリストを信じることによって義とされた者たちは、その義が今の生活の動機、原動力として愛のある生活を実現していくのです。ローマ13：12で「光の武具を身に着けましょう」とパウロは言っていますが、すぐ後の14節では、「主イエス・キリストを身にまといなさい」と繰り返しています。キリストの命をもって、日々聖霊の導きを受けて生きることこそ、目覚めた生き方なのです。